

猫の「人生論」

渡辺利夫（拓殖大学学事顧問）

熱中症、熱中症とテレビでは大騒ぎである。八十歳前後のわが夫婦は、クーラーの効いた部屋に蟄居していて、熱中症らしき症状とは無縁である。ところが、可愛がっている猫が熱中症にかかってしまった。吐瀉を繰り返してあとはぐったり、これは危ない直感、動物病院に連れていった。診断の結果は、血糖値が極端に低下しているから、三、四日の一間、入院して治療を施せば完治しますよといわれ、実際そのとおりになつた。その後、三週間ほど経つが、元気そのものである。自分がひどい病であつたことなど、すっかり忘れてしまつてゐるらしい。どうも猫という存在には、過去とか、ましてや未来などという厄介な観念はないようだ。時間は、過去、現在、未来といふうに直線的に進むと人間は考へがちだが、猫にはそんな観念はないのである。快と不快という感覚はあるが、これもいま生きてここに在るときの快、不快だけである。過去や未來のことなど考へてはいないらしい。猫の面倒を見ていると、これが自然生命体としての本来の姿なの

ではないかと思はれる。人類も生成して間もないころには、過去、現在、未来へとつづく時間の流れは、そういう言葉や観念がなかつたために、そもそも存在していなかつたのではないか。

過去を顧みれば悔恨であり、未来を慮れば不安である。過去は“過ぎ去つたもの”であつて、これを消し去ることはできない。未来は“まだ来ぬもの”であり、未来がどういうふうになるのか、これは幻の想像でしかない。過去と未来に拘泥するのは人情だが、この人情に振り回される人間を原型的に示すものが、強迫神経症である。過去と未来にかかずらわつて、結局は、現在をまつとうに生きることができない。そういう症状が強迫神経症の厄介なところである。猫が強迫神経症と無縁なのは、彼の「人生」がday by dayだからである。高齢社会をどう生きるか、私ども老人にとつては大問題だが、要するに、現在をよりよく生きるということなのではないか。こんなことを書いてみると、次の著作のテーマは猫の「人生論」となりそうな気もする。

一九三九年、山梨県生まれ。七年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部学部長、学長、総長などを経て、一〇一五年十二月より現職。